



ひよこだより

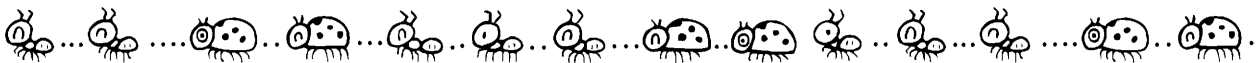
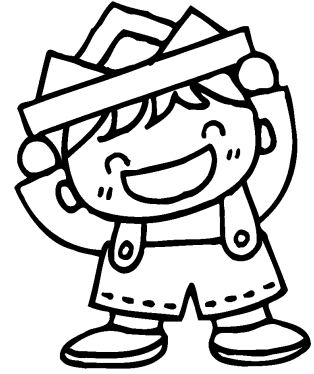


都立葛飾ろう学校 乳幼児教育相談
令和4年5月1日 NO. 2

体験！やってみよう！

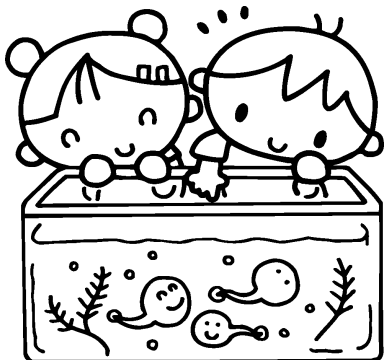
桜の花が終わり、ツツジの花が咲き誇る爽やかな季節となりました。色とりどりの花に誘われるように虫などの小さな生き物たちも活発に活動を始め、お散歩が楽しくなる時期です。帽子をかぶる、こまめに水分補給をする等、早めの熱中症対策をとりながら、風薫る季節を楽しみましょう。

この時期にひよこ組の恒例の生き物と言え、おたまじゃくしです。今年も幼稚部の園庭にある小さな池に、たくさんのおたまじゃくしが元氣いっぱい生まれました。園庭のどこかに住んでいるヒキガエルが産んだものです。先月下旬に1歳児と2歳児のグループ活動に参加している子供たちが、保護者の方と一緒に池からすくって、ひよこ組に持ってきました。バケツにいっぱいすくってきたおたまじゃくしを、子供たちの目の前で大きな水槽に移します。池の中で見るよりも、様子がずっと見やすくなり、子供たちは食い入るようによく見ていました。そして茹でたほうれん草の葉を餌に、小さくちぎって一人一人が水槽へ入れました。これから毎回餌やりをしながら、おたまじゃくしに前足や後足が生え、カエルへと変化していく様子を子供たちと一緒に楽しみたいと思います。



「聞いたことは忘れる。見たことは覚える。やったことは理解する。」

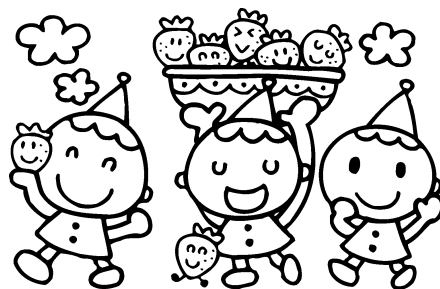
このおたまじゃくし体験のように、日頃から「体験を大切に」と様々な活動に取り組んでいるひよこ組ですが、先日この言葉に出会い、あらためて体験すること、子供自身が自分でやってみることの大切さを考えさせられました。この言葉は、今から2500年ほど前の中国の思想家によるものと言われています（老子、または荀子の言葉とされています）。私たちは初めて知る事柄について、人から話を聞いただけではそのうちに忘れてしまいますが、自分で見たことについては記憶に残ります。「百聞は一見に如かず」などとも言いますね。そして、さらに自分でやってみたことについては、よく理解することができるという、体験の大切さや学ぶということの基本を唱えた言葉です。



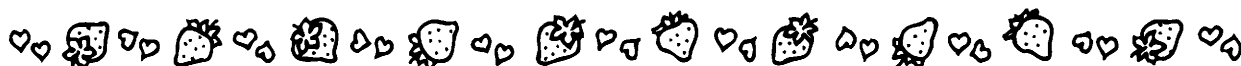
聞こえない・聞こえにくい子供たちのことを表した言葉ではありませんが、補聴器や人工内耳をつけても環境に左右されやすく曖昧な聞こえの中にいる子供たちにとって、この言葉はまさに、彼らの学びの様子を表していると感じました。

小さな子供たちの生活は、まだ知らないことで満ち溢れています。大人にとっては当たり前の物事も、子供たちにとっては全てが新しい発見です。先に挙げたおたまじゃくしも、大人が前もって水槽に入れて、教室に置いておくこともできます。その方が早く作業は終わられます。写真や絵本を使って、おたまじゃくしがいた池の話を

することもできるでしょう。でも、子供の立場になって考えてみると、ある日突然、教室に置かれたおたまじゃくしについて、「幼稚部のお庭の小さな池に住んでいたんだよ。バケツに入れて、運んできたよ。」等と、いろいろ教えてもらっても、幼稚部の園庭に行ったこともない子供にとっては、よくわかりません。よくわからないので、話も途中で、他の事へと興味を移してしまうでしょう。聞こえる・聞こえないに関わらず、言葉を獲得途中の幼児は言葉だけの説明では、十分に理解できず忘れてしまいやすいのです。しかし、体験の中で自らの五感を通して感じたことは、その体験とともに記憶に残り、その物事への理解を深めてくれます。



聞こえない・聞こえにくい子供たちにとっては、「聞いたことは忘れる」というより、そもそも「聞いたことは、よくわからない」というのが、実際のところでしょう。聴覚からの情報は、本人の聴力はもちろん、その時の周囲の環境や子供本人の注目や集中力によって大きく影響を受ける不確実なものです。それに比べ視覚的な情報は、見えていさえすれば確実にわかります。今、目の前で体験していることに対して、手話や写真カード等と合わせて子供の気持ちに寄り添った言葉かけを受けることで、聞こえない・聞こえにくい子供たちも体験と言葉を結びつけて理解を深めていきます。確実にわかる方法を多用して、いろいろな体験を通して学ぶ機会をたくさん持たせてあげたいですね。



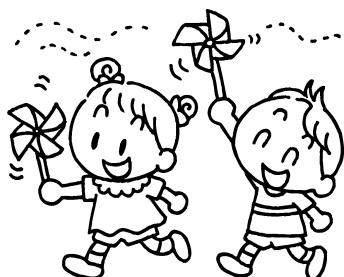
さて、こうして体験したことの理解が、さらに深まり定着する方法があるのですが、それは一体どんな方法だと思いますか。

まず大前提として、その体験が子供にとって心が動かされた体験であることが大切です。うれしかったこと、楽しかったこと、驚いたこと、怖かったこと、痛かったこと等、体験の中で心が大きく揺さぶられた出来事は、印象深く記憶に残ります。

その上で、「その活動を何回も繰り返し体験する」というのが1つの方法です。毎日おたまじゃくしに餌やりを続けてお世話をしていけば、おたまじゃくしについて詳しくなっていくでしょう。おたまじゃくしの手話を覚えたり、さらに成長すれば、「おたまじゃくし」というひらがなを覚えたりするようになる子供もいるでしょう。おたまじゃくしの体験を積み重ねることで、理解を深め記憶への定着が促されるというわけです。

もう一つ、体験は一度きりでも、より記憶が定着していく方法があります。それは、「体験したことを他の人に伝える、教える」という方法です。おたまじゃくしの体験は一度きりで終わってしまっても、おたまじゃくしをいっぱいすくってバケツに入れて運んだことを、写真を手掛かりに親子で話をしたり、さらに他の家族へ伝えたりする等、自分の体験を自分の言葉にして繰り返し誰かに伝えることで、体験を通じて理解したことが、より深く記憶に残ると言われています。

1・2歳児の子供たちは、もちろんまだ自分の力だけで体験したことを話すのは難しい時期です。



過去の出来事を思い出すのも、手掛かり無しには難しいですね。そこで使えるのが、体験カードや写真絵本等です。絵や写真等を手掛かりにして、その体験を思い出しやすくするとともに、会話の手掛かりにすることができます。体験の後にも、子供の気持ちに寄り添った親子の会話の時間をもつことで、生活の中の体験を、より実りある豊かなものにしていきましょう。

(文責：松澤)